

## 越前市政報告

越前市長 奈良俊幸

本庁舎の建設については、本年（令和元年）10月末の完成に向け、内装の仕上げや建具の取付け工事、外構工事を進めており、11月に竣工式を行い、来年1月6日に供用を開始します。

緊急発掘調査で出土した石垣や礎石等の利活用については、昨年9月から5回にわたり、庁舎前ひろば整備・利用検討会議において庁舎前ひろばの整備方針や利活用に向けた議論を積み重ね、7月22日に検討会から報告をいただきました。

報告では、石垣の活用テーマを「歴史を偲ぶ」とし、具体的な整備方針とともに、ひろばの利活用方法に関する意見を取りまとめていただきました。

一方、今立総合支所が入居する「あいぱーく今立」については、賑わいの創出や地域振興を図るため、多目的ホールや会議室等の利用を促進した結果、昨年9月25日の供用開始から8月31日までの約1年間に1,044件・26,292人と、多くの市民に利用いただいています。

また、「あいぱーく今立」周辺に民間活力による都市機能の誘導を図るため、旧今立総合支所跡地への進出希望者を総合評価落札方式により8月26日に審査した結果、東側区画が「緑に囲まれた木の店舗（みせ）」というコンセプトのもと、越前和紙の使用や地域情報の発信等の提案をいただいた株式会社福井銀行に、西側区画が賑わいスペースや地域貢献等の提案をいただいた福井丹南農業協同組合に決定しました。

JR武生駅前のアル・プラザ武生では、3階に市民交流センターと全天候型の子ども広場を整備するため、6月から工事を進めており、11月1日にオープン予定です。

4階を含めた施設の愛称を公募したところ、全国から322点の応募があり、学識経験者や市民団体、市の代表者などで構成する選考会議で「市民プラザたけふ」に決定しました。

全天候型の子ども広場については、加古総合研究所と協議の上、広場全体の愛称を「てんぐちゃん広場」とし、広場内を発達段階に合わせて3つのゾーンに分け、寝ころびゾーンを「さあちゃん、ゆうちゃ

んのおへや」、手や頭を使って遊ぶゾーンを「101ちゃんのおへや」、体を使って遊ぶゾーンを「どんどこどんのおへや」としました。

いずれも本市出身の絵本作家・かこさとし氏の絵本から名付けたもので、かこ氏の作品を通して、子育てに関わる豊かな文化を多世代で体験できる広場、子どもたちの自立を育む遊びの場となるよう整備を進めています。

北陸新幹線の整備については、令和5年春の開業に向け、市内全区間で土木工事が行われており、武生トンネルの工事は8月に90%の掘削工事を終え、11月には西谷町地係から中平吹町地係に貫通する予定です。

また、鉄道・運輸機構から4月17日に駅舎の内観を含めた実施デザインが発表され、コンコース中央の天井に越前和紙の技法である「流し漉き」の動きを表現した和紙照明を設置することや、待合室に和紙を使用すること、ホーム階の待合室は組子の技術が感じられる格子戸をあしらったデザインとすることなどが計画されています。

南越駅（仮称）に併設される「道の駅」については、令和4年度中の開業に向け、物販飲食等の運営と設計業務を委託する事業者の公募を行い、受託候補者として8月8日に株式会社鮮魚丸松・株式会社木下設計のグループを選定しました。

南越駅（仮称）周辺の土地利用については、民間活力等の導入により広域高次都市機能の誘導を図り、本県の魅力を高める拠点として整備されることを期待しており、昨年12月21日に地元代表者や地権者等で構成する南越駅周辺まちづくり協議会が設立されるとともに、学識経験者や県幹部等の参画を得て、1月30日に南越駅周辺まちづくり計画策定委員会の第1回会議を開催しました。

本市を含め全県的な課題である若者、中でも女性のUターンを促進するため、商業・観光・健康・スポーツなど第三次産業の進出を促し、魅力ある就業機会と賑わいの創出に繋げていくことを目指しています。

併せて、モノづくり都市である本市のさらなる発展に向け、ハイテク企業の進出などによりAI・IoTの拠点として整備していくことも検討しています。

南越駅周辺まちづくり計画の令和2年3月の策定に向け、引き続き県と連携し、社会経済情勢などを踏まえながら、同駅周辺の土地利用

策を検討してまいります。

人口減少への対応については、平成27年11月に策定した、「生産年齢人口の確保」「IJUターンの支援」など5つの基本目標を掲げる市総合戦略を着実に推進するため、全庁を挙げて人口減少対策・定住化促進対策の取組みを進めており、その成果として、住民基本台帳に基づく本市の1月1日時点の人口は8万3,153人で、昨年1月1日時点と比べて92人増加し、2年連続で人口増加を達成しました。

また、4月1日時点の人口は8万2,754人と、国立社会保障・人口問題研究所の推計より約2,000人、平成27年11月に策定した市人口ビジョンに掲げた目標値より約1,500人多く推移しています。

今後も市内企業の事業拡張と雇用の増大が見込めるため、令和2年3月の策定に向け、本市の産業動向の特性を踏まえた市人口ビジョンと市総合戦略の改定作業を進めてまいります。

多文化共生社会への取組みについては、8月1日現在、本市には3,922人の外国人市民が生活しており、市人口に占める割合は4.8%となっています。

そこで、「いろいろな国の人たちが、お互いに認めあい、お互いに支えあい、郷土への愛着をもって共に創り上げる住み良いまち 越前市」を基本理念とする市多文化共生推進プランを3月に策定しました。

多文化共生社会の推進に向けて昨年度から、外国人市民対象の地域ミーティングを開催したり、地元の仁愛大学と共に学生や市保育士を対象に「ポルトガル語入門講座」を開講しています。

また、多文化共生の啓発イベントとして、11月17日に武生中央公園総合体育館（AW-Iスポーツアリーナ）で、市ミニワールドカップフットサル交流大会と市多文化交流フェスティバルを初めて開催します。

同日には、外国人市民の災害時における安全確保を図るため、市が発信する災害情報等をSNSを通じて外国人市民に伝達する、外国人市民防災リーダーの委嘱式も予定しています。

産業の振興については、3月25日に県が公表した「平成30年工

業統計調査」で、本市の平成29年製造品出荷額等が6,139億340万円となり、合併時の平成17年の4,054億8,918万円と比べて150%以上増加し、県内に占める割合も21.9%から29.4%に大きく増大しています。

市では、さらなる産業振興を図るため、令和2年3月に向けて市産業活性化プランの第3次改定を進めており、Society 5.0時代を睨んでAI・IoT等の導入による生産性向上への支援拡充やオープンイノベーションの促進などを検討しています。

伝統産業の振興については、8月31日・9月1日の2日間、武生中央公園の総合体育館（AW-Iスポーツアリーナ）と多目的グラウンドにおいて、市内外の伝統工芸やクラフトの魅力を作り手との交流を通じて身近に感じるイベントとして「-ECHIZEN-千年未来工芸祭」を開催しました。

海外も含む133の出展者による伝統工芸やクラフトの販売、ワークショップやテオ・ヤンセン展の先行展示の他、屋外では飲食の出店や伝統工芸にまつわる音楽の演奏、和紙イルミネーションの展示、アリーナ外観でのプロジェクトマッピングなどを実施し、2日間に1万1,000人を超える来場者を迎え、会場は大いに賑わいました。

昨年秋に成功裏に開かれた福井国体については、そのレガシー・プログラムとして8月17日に武生中央公園総合体育館（AW-Iスポーツアリーナ）で「はじめてフェンシング」を開催しました。

リオデジャネイロオリンピックのフェンシング・エペ個人で入賞に輝いた本市出身の見延和靖選手と佐藤希望選手を迎え、トークショー・エキシビジョンマッチ・フェンシング体験教室・ジュニア選手への特別指導を行っていただき、フェンシング競技の普及啓発と競技力向上を図りました。

「はじめてフェンシング」の冒頭には、3月と5月のグランプリ大会で日本人初の2度の優勝に輝き、「年間世界ランキング1位」との日本人初の偉業を成し遂げた見延選手の栄誉を称え、「越前市市民栄誉賞」を授与しました。

見延選手と佐藤選手には、来年の「東京2020オリンピック」でのメダル獲得を目指して、ますますのご活躍をお祈りします。

武生公会堂記念館での展示については、昨年5月に亡くなられた絵本作家・かこさとし氏の特別展「加古里子ーただ、こどもたちのためにー」を3月21日から5月12日まで開催しました。

かこ氏が亡くなられて約1年を迎え、加古総合研究所が全国各地で巡回展を開催するにあたり、最初の巡回展がふるさと越前市で開かれたものです。

また、7月5日から9月1日までは「極 池上遼一展」を開催しました。

「クライングフリーマン」「サンクチュアリ」「男組」「HEATー灼熱ー」「BEGIN」などの作品で知られる、本市出身で「越前市ふるさと大使」を務める劇画家・池上遼一氏の全国初の展覧会です。

池上氏には「越前市三大グルメ」のボルガライスのポスターを制作いただいたご縁から、ボルガライスを提供する市内の飲食店を巡るキャンペーンなども実施しました。

コウノトリが舞う里づくりについては、白山地区の安養寺町の人工巣塔に営巣し、4月に産卵した「たからくん」と「みやび」ちゃんのペアからヒナが誕生したと、5月14日に本市と県が発表しました。

野外コウノトリのヒナが県内で誕生したのは、実に55年振りです。

本市は約10年前からコウノトリが舞う里づくりに取り組んできたことから、自然繁殖が実現したことを大変嬉しく思います。

残念ながら誕生した3羽のヒナは、5月20日までに死亡してしまいましたが、引き続き「市の鳥」であるコウノトリの自然繁殖に向け、地域住民や関係団体と連携し、環境調和型農業の推進や水田退避溝等の整備を行い、「生きものと共生する越前市づくり」を推進してまいります。

一方、坂口地区で昨年9月に放鳥した「りゅうくん」が5月14日に服間地区の水田に飛来し、コウノトリの生息範囲が市西部地域から市内全域に広がりを見せ、今立の住民の関心も高まってきました。

原子力災害への対応については、県が8月30日・31日に関西電力美浜発電所での災害を想定した原子力総合防災訓練を実施し、本市も県の訓練に初めて参加して、住民参加の訓練を行いました。

あわら市と坂井市への避難が県広域避難計画に位置付けられている5地区を中心に市内全17地区より、防災士も含めて131人の市民がヨウ素剤の配布やスクリーニングの訓練を行った後、実際に避難することとなる両市の広域避難先までバスや自家用車による避難を行うとともに、防災行政無線や緊急連絡メール等での避難情報の発令により、1,181人の市民が自宅など建物の中に避難する屋内退避訓練を行いました。

また、関西電力株式会社・日本原子力発電株式会社・日本原子力研究開発機構の職員に参加いただき、市災害対策本部の運営訓練を3回実施しました。

訓練に参加いただいた市民や市職員にはアンケート調査を実施しており、今回の訓練の課題と成果を早期に検証し、本市の原子力防災計画に基づく住民避難計画等に反映するとともに、外国人市民に対する原子力災害の情報発信（ポルトガル語・ベトナム語・中国語等）など、市では対応できない課題等については国や県、事業者に対策を要望する予定です。

以上、当面する市政の重要課題について、取組みの一端をご紹介しました。

今後も「元気な自立都市 越前」の創造を目指して、市民と協働のまちづくりを推進してまいりますので、武生郷友会の会員の皆様には、ふるさと納税をはじめ越前市政に対する引き続きのご支援とご協力をお願い申し上げます。